

【情けは人の為ならず】

この諺は、「他人に情けをかけておけば、いつかはそういう人には良い報いがめぐりめぐって返って来るものである。だから、今は他人の為にしているつもりでも、結果的には自分の為にしているようなものである」という意味で、「人には親切にするものだ」ということを教えた諺です。

ところが、私の友人が大学でこの諺の意味を書かせたところ、「人に情けをかけることはその人の為にならない」という答や、「人に情けをかけることは自分の為にならない。つまり損をする」と書いた学生が多かった、ということです。

“人”という言葉は、自分のことを指して言うこともありますが、この“人”は勿論“他人”という意味でなければなりません。また、“為ならず”は、“為ではない”という意味であって、“為にならない”という意味では決してありません。

諺というものは、長い時代にわたって、多くの人々の生活の中から生み出された、言わば知恵の結晶ですから、何よりもその正しい意味を汲み取ることが大切です。いい加減な解釈や勝手な判断をしてはなりません。

さて、“情”という字は、“心”の変形である“忄”と“青”とで作られた字です。“青”という字は、旧字体では“靑”でした。上の“𠂔”は“生”

で、これがこの字の音、セイ(ゼイ)ショウ(ジョウ)を表わしています。

下の“丹”は“丹”で、丹石を表わしています。丹石は赤い色をした石で、赤い絵の具はこの石を細かく砕いてそれから作ります。だから、“丹”は“赤い色”を表わす字として使われるようになりました。“丹心”は“赤心”と同じで“真心”の意味の言葉です。

ところが、丹石は青い部分を含んでいて、赤い絵の具を取ると同時に青い絵の具をも取るのです。つまり、“あお”は丹石より生ずるのです。だから、丹と生とて“青”とし、これで“あお”を表わしたのです。

“晴”は、空が青く、日が見えることで、“はれ”を表わした字です。“清”は、水が青く見えることで、水が澄んで“きよい”ことを表わした字です。晴も清も、澄んで清らかな状態を表わしていますので、“青”は“純粹”な意味を持つようになりました。

“情”は、だから“純粹な心”という意味の字です。“真心”“思いやりの心”“なさけ”を表わした字です。

“請”は、“真心をこめて言う”という意味の字で、“請願”というように使われます。

“精”は、米をよくついて、表面のうす皮やぬかの部分を除いた白米を表わした字です。純粹な米という意味の字で、うす皮のついた胚芽のある玄米“粗”に対する字です。今は“粗製・精製”“粗末・精巧”というように米に関係なく使われるようになりました。